

ふぞろいな秘密

2007(平成19)年6月23日鑑賞(ホクテンザ1)

★★



監督・脚本・出演＝石原真理子／原作＝石原真理子『ふぞろいな秘密』（双葉社刊）／出演＝後藤理沙／堀澤かずみ／河合龍之介／安達有里／花井美代子／小西博之／大島直也／梨元勝（シネマ&ポップコーン配給／2007年日本映画／93分）

……「安全地帯」の玉置浩二との不倫騒動などで「ブツン女優」と評されたのが、清純派女優石原真理子！ そんな彼女の自叙伝『ふぞろいな秘密』が50万部に迫るベストセラーになったのはなぜ……？ そして、その映画化で彼女自らが監督・脚本・出演したのはなぜ……？ そして、その読みの成否は……？ 芸能ニュースに疎いあなたも、完成披露試写会後の舞台あいさつでの面白いやりとり（？）くらいは知っておかなくちゃ……？

私の芸能ネタの仕入先は……？

私はいつの頃からか、テレビの（アホバカ）バラエティー番組を全く観なくなったし、週刊誌やスポーツ新聞を買って読むこともほとんどなくなった。そんな私の芸能ネタの仕入先は……？

私が毎週日曜日の朝フィットネスクラブで21kmのランニングをしている時に観ているテレビ番組は、10時まではNHKの『日曜討論』で、10時からは『サンデープロジェクト』と『NHK杯将棋トーナメント』の掛け持ち、そして11時45分からは『週刊えみいSHOW』。『週刊えみいSHOW』を約1時間観て、合計約160分のメニューを終了というのが、特別な予定がない場合の私の日曜日午前中の過ごし方。つまり、この『週刊えみいSHOW』が私の芸能情報の収集源なのだ（コマーシャルの間は『アッコにおまかせ！』に切り替えるが、ここでも似たような芸能ニュースが満載……）。

舞台あいさつでは……？

そんな番組で取り上げていたのが、「ブツン女優」と呼ばれた石原真理子が監

督・脚本・出演した映画『ふぞろいな秘密』の5月29日における完成披露試写会とその後の舞台あいさつの様子。ここで石原真理子は、「編集作業の途中でプロデューサーと音信不通になり、勝手にフィルムを現像されてしまった。数百万円の自費を出して効果音などの手直しをした」とトラブルがあったことを告白したから会場はビックリ。そのうえ、その会場には笠原正夫プロデューサーがおり、彼は「こだわりだしたらきりがなく、公開に間に合わせるために編集を切り上げた。彼女からは電話もメールも来ていないので音信不通とは言わない。もう二度と一緒に仕事をしたくない」と反論したから、さらにビックリ……。そこで、トラブル大好きなマスコミはこぞってこの「論争」の様子を取りあげて、あれこれと批評……。といっても、その非難の矛先はもっぱら、「いろいろありましたが、公開に間に合うし、いいかな。ただ、事実を伝えたかった。綺麗で才能があるといじめられます。あはは！」と高笑いした石原真理子に向けられることに……。ちなみに、『アッコにおまかせ!』では和田アキ子は、「バカじゃねーの」とのひと言でバッサリ……。そんな話題の中で公開された映画の出来については、やはり自分の目で確かめなければと思い、土曜日の6時40分からの上映を観るべくホクテンザへ出かけていったが、案の定、観客はガラガラ……。

『ふぞろいな秘密』がなぜベストセラーに……？

石原真理子が自ら監督してこの映画をつくろうと思ったのは、女優生活25周年を迎えた石原真理子が発表した『ふぞろいな秘密』が、2006年12月の発表からわずか3カ月間で50万部に迫るベストセラーになったため。もちろん私はこんなくだらない(?)本を読んでいないが、週刊誌の見出しや私の仕入れる芸能情報によると、この本では「安全地帯」の玉置浩二との出会いと別れの他、数々の男性タレントとの恋の遍歴が実名で生々しく描かれているらしい……。つまり、この本がベストセラーになったのは、ゴシップネタが大好きなレベルの低いマスコミとそれに踊らされているアホバカ国民のおかげであり、決してその本に何らかの価値があったわけではない……。？ 本を出版する以上、たくさん売ってほしいと願うのは私も同じだが、そうかといって、何でもいいから売ればいいというものでもないはず。自叙伝を書くにしても、そこにはやはり登場人物に対する何らかの配慮が必要では……。？ しかしこの映画を観ている限り、そんな配慮は全くなし。玉置浩二がどこまで暴力的だったのかは知る由もないが、長年弁護士として離婚事件などもやってきた私としては、こんな

一方的な描かれ方は公平を欠くものであることは明らか……？

後藤理沙の演技力は……？

パンフレットによると、この映画で主役となる20歳の石原真理子には、大々的なオーディションの結果、「ポカリスエット」のCMで脚光をあび、一躍国民的アイドルへと駆け上がった後藤理沙が選ばれたとのこと。10代の石原真理子を演ずる堀澤かずみもこの後藤理沙も、本物の石原真理子のトレードマークである長いワンレンの髪型だから、顔の特徴がわりと丸わかりになる……？

しかして、10代の堀澤かずみは結構美人だと思ったが、20代の後藤理沙はわりと顔がデカく、またカメラの角度によっては下ぶくれ気味の顔の輪郭が不恰好……？ そのうえ、DV（ドメスティック・バイオレンス）を受けている時の演技は、それなりの迫真性があるものの、普通の会話のシーンではまるで学芸会のような演技力とってしまっただが、それは私だけ……？ この演技力でオーディションでトップとなったというのは、どう考えても不思議だが……？

河合龍之介はハンサムすぎるのでは……？

1964年生まれの清純派女優石原真理子の不倫熱愛発覚と騒がれたお相手である「安全地帯」の玉置浩二は1958年生まれだから、2人の年の差は6歳あったはず。ところがこの映画で、「セーフティゾーン」の山置洋二を演ずる河合龍之介は、後藤理沙と同じ1983年生まれだから、まだ23歳のハンサムないい男。しかし、ヒットチャート1位の曲を連発するトップアーティストが23歳の若さというのは、ちょっと不自然では……？ おまけにこの河合龍之介はやさしさを表現するにはその甘いマスクがピッタリだが、プレッシャーに苦しみ酒に溺れる中、つい真理子に当たり散らし、遂にはDVに及んでいくという心理過程の表現力が不十分……？ したがって、あんなにうまくいっていた2人の関係が、なぜ急に悪化したのかという筋がなかなか見えてこない……？ これは何よりも、20代の真理子と同じ年のハンサムすぎる河合龍之介をオーディションで選んでしまったというキャスティングミスでは……？

女の厚かましさは底なし……？

石原真理子は、過去の男性遍歴を赤裸々に綴った本をベストセラーとさせて大金を

稼いだ後、直ちに自ら監督・脚本してこれを映画化したわけだが、映画づくりは巨額の元手がかかるから、黒字にするだけでも大変で、大儲けするのは難しいはず。しかし、そこは読みの範囲内とばかりに、この映画ではさかんに女優石原真理子の純粋性やその生きざまの正当性そして現時点における再生、再出発ぶりをさかんにアピールしている。しかしこの映画における、そんな自分自身の描き方を見ていると、女の厚かましさはホントに底なしだなと思ってしまったが……？

話題性優先のキャスティングも……？

石原真理子の描く戦略は、とにかくマスコミに取りあげてもらうための話題性を優先させること……？ そのため、自分自身が出演するというアピールの他、安達祐実の母親で、2006年に写真集『Myself』を発表したという1957年生まれの安達有里をマネージャー役として映画初出演させたり、芸能レポーターの大御所梨元勝を、ワイドショーの司会者として出演させたりと、何かと話題性優先のキャスティングを……。

安達有里はもちろん喜んで出演したのだろうが、梨元勝の場合はどうなのだろうか……？ 私が疑問に思うのは、梨元勝は芸能レポーターとして石原真理子の行動についてかつて批判したことはないのだろうか、ということ。もともと芸能レポーターという仕事は、雰囲気を読んでいかようにもレポートする日和見主義者の集まり（？）だから、かつて批判的発言をしていたとしても、この映画への出演には何の抵抗もなかったのかもしれないが、やはりそれなりの節操というものが必要なのでは……？

出演料をいくらもらっているのか知らないが、こんな映画に出演する以上、梨元勝は石原真理子擁護派の芸能レポーターという旗印を明確にしなければ……？

女優石原真理子の再出発は……？

この映画のラスト近くに登場するように、玉置浩二との恋に破れた石原真理子は、1995年にアメリカ留学を執行し、10年間の充電期間を終えて2005年から日本に戻り、本格的な芸能生活を開始したとのこと。そして、私が4月4日に観た『あしたの私のつくり方』（07年）では、主人公寿梨の母親役で登場したが、さて1964年生まれだから既に43歳になる女優石原真理子の再出発は……？ 少なくとも、こんな映画をつくって「私は女優だけではなく監督業もできるのよ」と自慢しているようでは、あちこちから再び反発され、つまはじきにされるのでは……？ 2007(平成19)年6月25日記